

# 長期間不登校状態が続いた生徒に対する対応事例

キーワード： 専門機関との連携 適応支援員との連携 家庭との効果的な連携の視点

この事例解説では、学校と家庭との関係がうまくかず、不登校が長期化したケースの解決に焦点をあててまとめてみました。

## 実践の概要

1年生の春、Sは学級で体育祭の係りを決めていた時に実行委員のKの「はっきり言って！・・・ムカつく！」という言葉に反応して、鉛筆入れをKをめがけて投げつけてしまうという出来事があった。普段大人しい子とわかれていただけに「Sがキレた」ということで周囲も驚いた。

その後、担任が間に入り、お互いに謝ったが、そのあとSは学校に行けなくなってしまった。母親はSが不登校になった原因は、担任が本人の話も聞かず、一方的に喧嘩両成敗的に処理してしまったところにあると思込んでいる。また、この件で学校に呼ばれたことも納得できないと言っている。

学校に対して拒否的な態度を示す母親に対して、対応がうまくいかないまま、1年が過ぎた。2年の春になり、母親から「長い間、娘は放っておかれた」という抗議の電話がきた。学校ではSのために保護者との関係修復が第一と考え、話し合いをもちかけたが、断られてしまった。

## 対応の概要

### 1 適応支援員のMさんが動く

担任は学校からの連絡を拒否されていたにもかかわらず、母から抗議の電話がきたことにとまどい、教育相談担当のW先生に相談した。

相談の結果、家庭との連絡は担任ではない方がよいということになり、適応支援員のMさんに週1回家庭訪問をしてプリントを届けてもらうことにした。

最初のうちは母親だけでSには会えなかったが、1ヵ月後、なんとかSと話ができるようになった。

### 2 保護者との関係が悪化する

2年の秋に修学旅行がある。適応支援員のMさんは家庭訪問をし、「修学旅行のしおり」を見せながら、楽しいイメージをもたせた。

1週間後、担任は学年主任に参加者の報告を求められ、急ぐあまりに自分の判断で家庭訪問をしてSに「修学旅行どうする？」と聞いた。Sが黙っていたので言葉を続けて「行くの？行かないの？ここで決めてほしいんだけど・・・」と再度聞くと、「行かない」と返事が返って来た。

その晩、母親から校長に「本人が迷っているときに、あんな聞き方をするなんて信じられない」という電話があった。

そこで、学校は本人が決定するまでいつまでも待つことにし、再度家に連絡をしたが、母親は「もう、修学旅行には行かないので結構です」と拒否的な態度だった。

### 3 専門機関に相談する

教育相談担当のW先生は、担任と家庭がこじれてしまい、このままではSに登校をうながすことは難しいと考え、チーム会議で相談し、関係修復のためには専門機関と連携してチームを作って進めた方がよいということになった。

最初、母親はしぶっていたが、適応支援員のMさんが「Sさんの成長のために行う相談だから・・・」と何度も足を運んで話をしたことで納得し、専門機関で相談を受けることになった。

### 4 専門機関で面談を行う

面談日にSを誘ったが、「どこにも行きたくない」と動こうとしなかったので母親だけの面談になった。

#### 母の面談から

Sは、午前2時くらいまで、テレビを見たり、ゲーム、インターネットをしていて、昼夜逆転している。朝は、両親が出勤する前に起こしても起きない。「学校は行かない」「面倒くさい」を連発する。起きないので、そのあとは祖母に頼んで仕事に出かけている。

家の手伝いもせず、好きなことばかりやっている。祖母にいつも「Sはなぜ学校に行かないんだ」とうるさく言われて自分も辛い。

こうなってしまったのも全て学校に行けなく

なってからだ。Sの気持ちも考えずに学校は本当にひどいことばかりする。

せっかく一時期、やる気を出した時があったが、担任の言葉でまた、やる気をなくさせられてしまった。

#### 担任の面談から

あの件がきっかけにはなったとは思いますが原因はそれだけではないと思う。家で好きなことをやっている方がラクなので怠けだと思ふ。私は家族から拒否されているので迎えに行くこともできないので、家でしっかり起こして連れて来て欲しい。

私は一生懸命、やっているつもりなのにSの家の人はわかってくれない。

### 5 専門機関で支援したこと

#### 母親への支援

Sの話をしっかり聞き、気持ちを受けとめること。

Iメッセージで、自分の気持ちを伝えること。

家族の一員として家の手伝いをしてもらいやってくれたことを必ずほめること。

ルールなど「だめなことはだめだ」と毅然とした態度で言い、教えてあげること。

#### 担任への支援

「行く？ 行かない？」という二者択一の問いや「早く」という言葉は控えて、Sを尊重し、話し出すまでゆっくり待つこと。

Sを気にかけているというメッセージを伝えること。

「朝、起こして登校させて下さい」と言われると責められている気持ちになる。母親の辛い気持ちを理解し、勇気付けること。

### 6 専門機関の支援により、Sの気持ちをやっと聞くことができた

専門機関の専門員から、母親の辛い気持ちや担任のSを思う気持ち等を双方に伝えてもらったことで、関係が修復されていった。

また、適応支援員のMさんと担任と一緒に家庭訪問をし、やっとSの気持ちを聞くことができた。

体育祭の係り決めの時、Kの言い方に頭にきたけど、そのことは謝ってもらったのでもう怒っていない。私もカーツとなってしまったし・・・それより、ずっと休んでいるので、今1番気になるのは「勉強」です。

そこで、学習面の不安を取り除くためにはまず、一緒に話し合うことが有効だと考え、

次回、Sの家と一緒に学習の計画を立てる約束をした。

#### 実践のポイント

### 1 専門機関につなぐことができたこと

学校から「相談機関で相談しませんか」と保護者にもちかけた場合、保護者は「なぜ、私だけが相談しなければならないのか」「そんなにひどいのか、こうなったのが学校のせいだ。これ以上、イヤな思いはしたくない」という気持ちになることが多い。

そこで、今回は母親が信頼している適応支援員のMさんに間に入ってもらったことで、専門機関との相談が実現できた。

### 2 関係を悪くするコミュニケーションに気付いたこと

担任は自分の「問い」等のパターンが保護者との関係を悪化させているということが面接の中でわかった。そこで専門員の助言を受け、保護者に対して丁寧に、配慮してかわることでコミュニケーションがスムーズになっていった。

\* 関係を悪くする「問い」等のパターン

- ・ どうして返事しないの？
- ・ どうして学校に来ないの？
- ・ 行く？ 行かない？
- ・ 早く、決めて！ 早く、言って！



詰問にならないようにすること  
結論を急がないこと

### 3 母がSのよさに目を向けたこと

母親はSのネガティブな感情表現への対応について困っており、要求に対して不本意ながらも応えてしまったり、媚びてしまったりしていた。疲労感が高まり、Sとのかかわりがうまくいかない理由を学校の対応のまずさにあると受け止め、Sと向き合っていなかった。専門機関で面談をすることにより、心に余裕ができ、Sのよさに目を向けることができるようになっていった。

### 4 Sが1番の不安に感じている勉強への支援ができたこと

学校と母親との関係が修復され、適応支援員のMさんの力を借りて、担任が家庭訪問をして、本人と話をするできるようになった。そのことにより、Sの不安が勉強にあることがわかり、一緒に学習計画を立てることで見通しを持たせることができた。